The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	比較経済発展論 : 歴史的動学理論の形成
Author(s)	齋藤, 謹造
Citation	大阪大学, 1983, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33760
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

氏名・（本籍）	齋藤謹造（さいとうきんぞう）
学位の種類	経済学博士
学位記番号	第 6236 号
学位授与の日付	昭和58年12月13日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**比較経済発展論** **——歴史的動学理論の形成——**
論文審査委員	（主査） 教授 建元 正弘 （副査） 教授 安場 保吉　教授 山下 博

論文内容の要旨

本論文は，その表題が示すように，近代的経済発展の諸過程とその現代的状況とを，できるだけ理論的に，かつ包括的に解明しようとしたひとつの試みである。諸経済社会はそれぞれに個性的で，かつ互いに複雑に交流しつつ変動し，体制的特質を歴史的に変化させている。したがって一国の経済発展と体制変容の過程を的確に把握しようとすれば，その歴史的過程自体を究明するだけでなく，他の経済社会のそれと比較して特質を把握し，かつ国際的関連をも広く探求しなければならない。それを十分に進めようとすれば，われわれはまさに世界史的視野をもつことが要求されよう。そして世界史的な拡がりで経済発展を認識するには，各国の多系的な経済発展を位置づけ，その相互の絡み合いを究明する図式が必要であろう。本論文はその要請に応じて理論的枠組を設定し，経済発展の多様な現実により具体的にアプローチする。

さて経済発展と体制変容の問題は，もともとマルクスが精力的に追求した主題であり，われわれもマルクスの巨大な業績を避けて議論を進めることはできない。よって本論文の第1部は，まずマルクスの理論体系の批判的検討にあてられる。ここでは唯物史観の形成から『資本論』の叙述，晩年の多系史観への傾き，そしてマルクス没後の帝国主義論の展開にいたる理論の流れを，近代理論の分析用具を使いながら検討しつつ，マルクスから何を継承すべきかを考察する。マルクスの構築した理論的歴史像は，結局のところ重大な難点があり，それも彼の理論体系の欠陥に根ざしていることがここで指摘される。また多系的な史観もそこでは積極的に提示されなかったことが明らかにされる。

第2部は，われわれの理論体系，すなわち多系的経済発展理論の積極的な展開にあてられる。ここでわれわれは，近代的経済発展の過程一般を一方では生産力水準と体制変容の局面に即して区分し，一種

の段階論によって把握する。他方この経済発展の諸段階をさまざまな形で経過し，時にはトラップに落ちて経済停滞の状況に沈む諸国民経済の多様な展開を，いくつかの類型に分けて把握し，諸類型の国民経済のからみあう様式を究明する。

ここで類型化の端的な基準は，諸国民経済が近代的発展過程を開始する際の国際的環境のきびしさの如何である。同一の世界史的状況のもとに近代的な経済発展——発展の原動力を体制に組みこんだ上での自立的な経済発展——を開始した経済体制は，スタート時の時代状況の刻印を受け，発展パターンにその跡を残す。そして経済発展を先行した諸国と後発の諸国とは複雑に交流し，ダイナミックに相互の関係をかえていく。先なるものが後になるのはむしろ普通であり，経済発展競合の問題は，多系的経済発展理論の核心的部分に位置づけられる。

第3部は，各類型に属する諸国民経済の歴史的発展過程の特質を，体制的特性の形成と関連づけつつより具体的に把握し，比較することにあてられる。すなわちイギリスにおける古典的資本主義の建設から始め，19世紀に後進資本主義国とよばれた西欧大陸諸国，生まれながらの資本主義として発展したアメリカ経済，そしてこれらの諸国の周辺にあって19世紀後半に政府が資本主義的経済発展を主導した日本・イタリア・北欧・東欧などの諸国，さらに資本主義的経済発展がその後進性の故に定着せず，結局そのことが社会主義への道を準備したロシア，最後に20世紀後半にようやく本格的に経済発展を志向した今日の開発途上諸国を順次とりあげ，経済発展の歴史的諸過程を特徴的にとらえて比較検討する。それはわれわれの多系的経済発展理論の歴史的検証であるが，また同時に，現代の錯綜した諸経済問題をもたらした各国の歴史的事情を重点高揚的に把握するという意図もこめられているのである。

そして第4部は，多系的な経済発展の今日的帰結が何であり，どのように切実な問題をはらんでいるかを問題にする。内容的には，まず現代の経済発展に残されたポテンシャルの危機状況を直接に表現する資源公害問題，巨大化した技術体系とそれを担う大企業体制の今日的構造とその制御の可能性，現代の資本主義的混合体制の厄介な持病となったインフレと失業の共存現象，そして肥大化した公共部門をかかえる福祉国家の危機等々をとりあげ，資本主義体制が現代においていかなる変質を迫られているかを追求する。他方，現在の社会主義体制もその経済活動の停滞を通して経済組織の体制的欠陥を如実に露呈しつつあり，その改革のための苦悩も見逃しえない。また大方の開発途上国の過去からひき継いだ貧困は，まだ解決にはほど遠く，それが南北問題という形で世界経済に大きな影を投げかけていることは周知の通りである。われわれはこれらの諸体制の多面的な諸動向を観察し，政策主体が過去の歴史的過程に制約されながらも，将来に開かれたさまざまな可能性を選択し，現在を方向づけして国民経済を運営する実態を解明する。そしてラストに，世界経済の基本的動向について，若干の洞察を試みるであろう。

論文の審査結果の要旨

本論文は，提出者のライフワークであり，近代的経済発展の諸過程を体系的・包括的に整理したもの

である。

専門科学化した現代経済学がややもすれば精密な局所的分析に細分される傾向がある中にあって，提出者が，それらを包摂すべき壮大な歴史動学の構築を試みた意義は大きい。

よつて経済学博士の学位に値すると判定する。